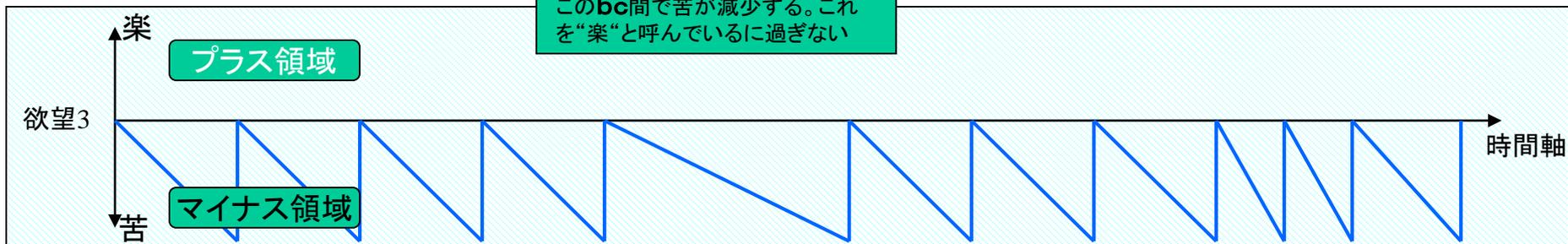
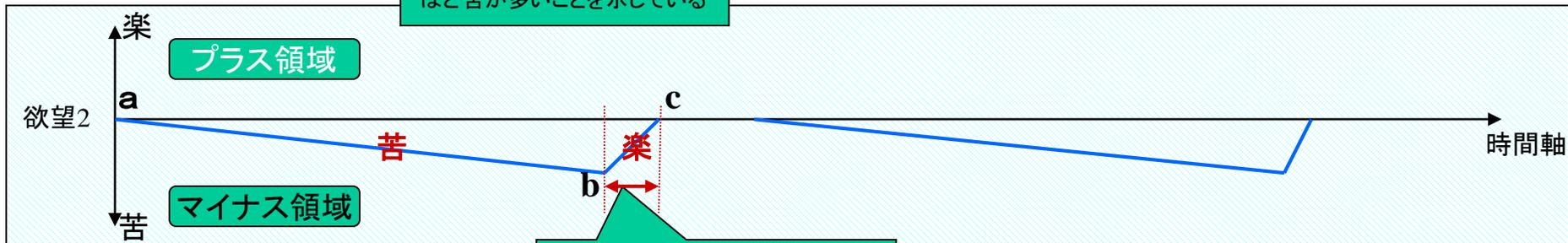
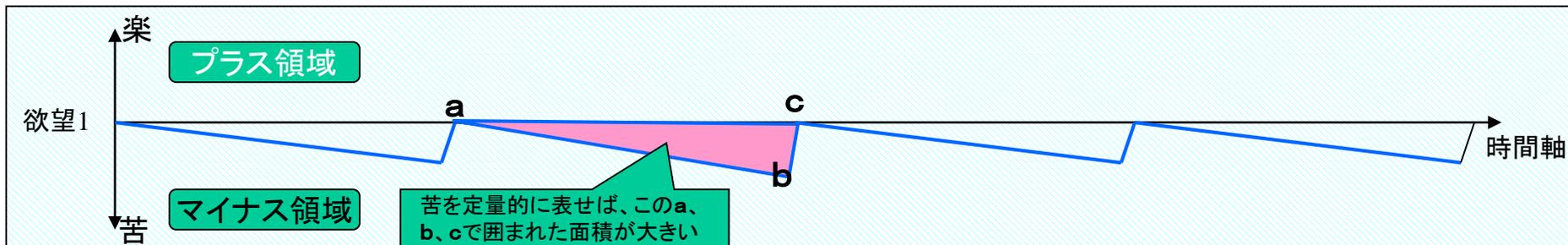


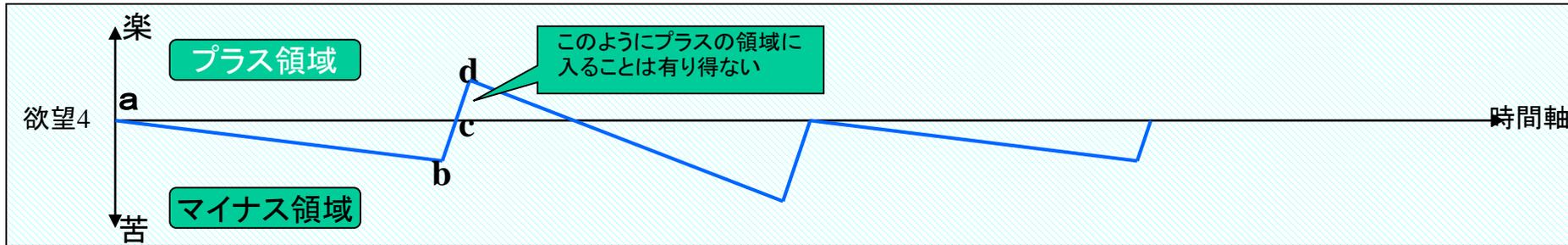
苦と楽



●解説

人間には食べたい、飲みたい、足の裏をかきたい(その他、愛されたい、愛したい)など様々な欲望がある。それを欲望1、欲望2、欲望3、とする。欲望が起こった時点でその瞬間それが満たされるわけではない(時間差がある。もし時間差が全く無ければ欲望が存在すること自身認識できない)。従ってそれが満たされるまでは不快が伴う【上図欲望2のab間】。その不快を苦とし、上図のように苦と楽を上下で表すと、一つの欲望に関しては必ず苦の状態(マイナス領域)になる。「楽」とは何らかの外的要因により、その欲望が満たされた(例えば食べ物が得られた)状態(苦が減少した場合)を指す【上図欲望2のbc間】。従って苦楽の状態で苦の減少することではなく、純粹に“楽”の状態(つまりプラス領域)になることはない。さらに欲望は複数存在するため、合成すると必ず苦の状態にある。これが一切皆苦の意味である。つまり楽という実体(プラス領域になる状態)があるわけではない。

苦と楽

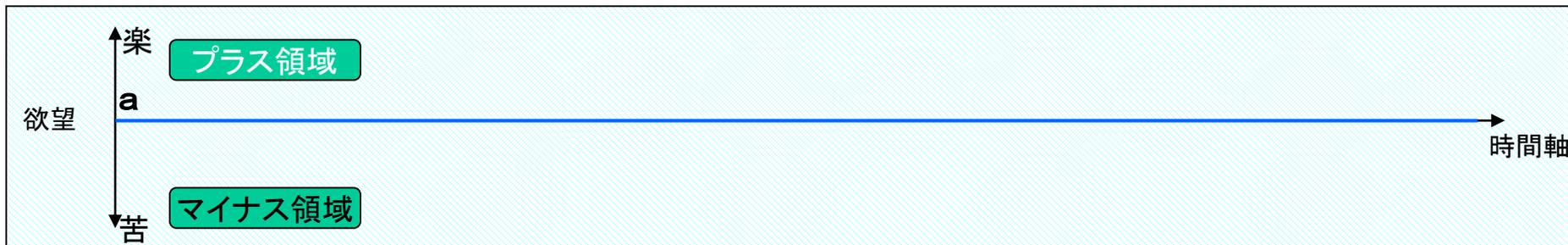


上記欲望4におけるbc間で欲望が満たされた後、さらにcd間でプラス領域に入ることは有り得ない。もし、プラス領域に至れば、人間は満足を得て、それ以上の欲は起きないはずである。(しかし実際は欲望は消えない)

人間は生まれてから死ぬまで常にこのマイナス領域、すなわち“苦”の状態から脱することは出来ない。なぜなら、人間は生きている限り、食べたい飲みたいなどの欲望はなくなるからである。

さらに、どれほどの満足を得ても、それを得ることによってさらに高い満足を求めるのが人間である。

この世で生存している限り欲望が無くなることはない。従って苦の状態は死ぬまで続く。逆にこの世に生まれて来なかった者、あるいは既に死亡している者には欲望が存在しない。従って、下図の通りプラスマイナスゼロ、すなわちプラス領域でもマイナス領域でもない状態。つまり苦も楽もない状態が続くのである。(欲望がなければ苦もない。生きている限り欲望は消えない。)



それでもあなたが、「人生には苦も楽もある」という考え方を捨て切れなければ、あなたは完全に商業主義に洗脳されている。この世を悲観的に捉え、さらにそれが社会に蔓延すると、世界が活気を失い、引いては景気が後退し、失業者が増す。つまり政府当局が恐れる結果となる。そのため政府は経済界と結託して国民を洗脳している？のです。

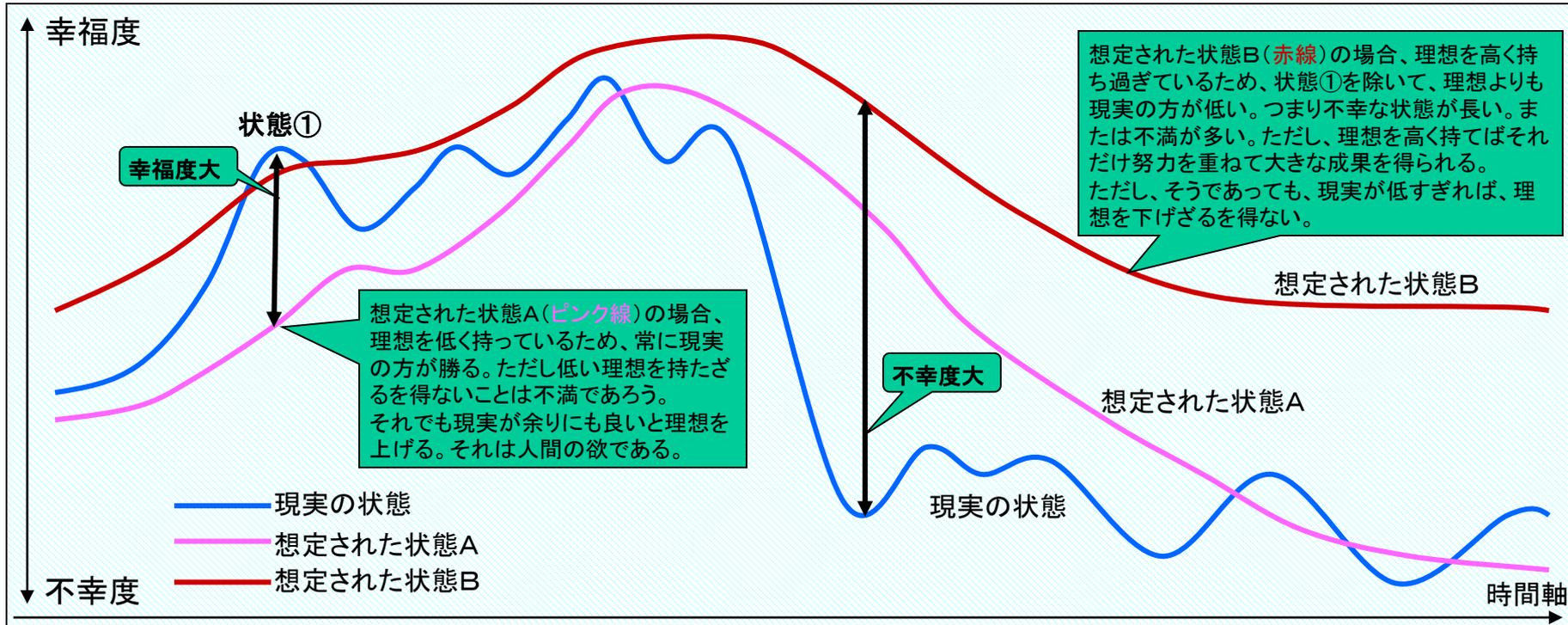
そもそも、人間がこの世は苦しみしかないという考え方を持てば、では生まれてこない方が良かったという考え方に陥る。そんな考え方を持っていたら人類は今日まで進化してこなかったでしょう。こういう考え方(生まれてこないほうが良かった)は、タブーであり、誰もそれを口にしない。ただし、それでは仏教の本質は分かりません。

想定原理(相対的幸福度の話)

一人の人間の人生をみれば、楽の状態というものは有り得ず、すべて苦の領域である。楽とは苦の消滅を指す。改めてここで幸福・不幸を定義する。幸福とは、その人間が想定した(予め頭の中で予測した)状態(別の言い方であれば「理想」と現実の状態(結果)を比較した場合、「現実」が「理想」に勝らなければ(好ましくないなら)「不幸」と定義して、勝れば(好ましければ)「幸福」とする。(ただし、これらの“相対的な”幸福も、苦の消滅(満足が得られること)によって生じる。即ち一切が苦であることにはわからない) 普通人間は未来の状態を予め想定する。「明日が(自分の誕生日で)楽しみ」、「明日が(試験があるため)憂鬱」という具合に、前もって未来の幸福の状態を予測しておくのである。しかしその予測が外れることも有り得る。例えば、誕生日に誰もプレゼントをくれなかった。あるいは試験は意外と簡単だった。その現実の結果と予想との違い(差異)が幸福度に反映される。

下図で、時間と共に理想(想定したもの)と現実がどう変化するかを示した。人間は通常現実(青い線)よりも理想(赤またはピンクの線)を高く持つ。現実が激しく変動するのに対して、理想は余り変化しない。しかし現実として悪い状態が長く続くと理想を下げる。そうして理想と現実のギャップを埋めようとするのである。逆に良い状態が続くと、理想の方を上げるのである。人間は思わぬ幸運に会う、あるいは大きな不幸にみまわれると、理想を(上げたり、下げたり)変化させるものである。現実として良い状態が続けば、理想もどんどん上げていくのは、人間の「欲」の現れである。

このように幸福あるいは不幸は相対的であり、現実と理想を比較したところにある。さらに理想(想定された状態)も現実に合わせて変化させざるを得ない。このように状態を予め想定する(人間の)心理学上の働きを「想定作用」(青山の造語)という。



本能的欲による作用

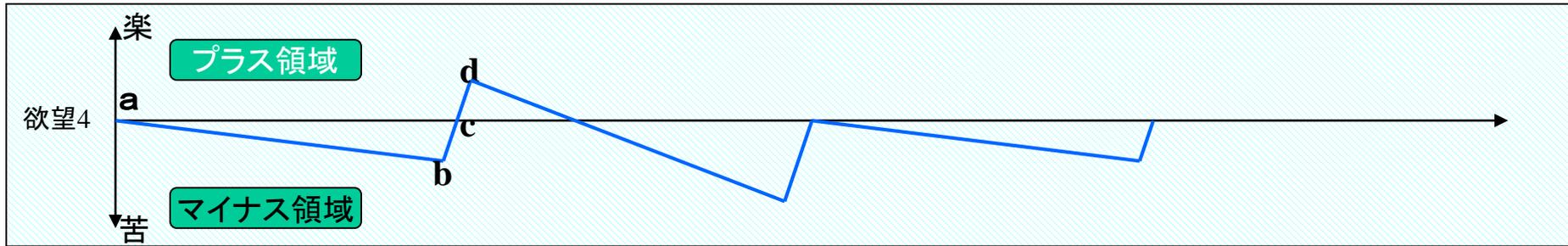


この本能的欲望は、自分の意志とは無関係に生起される。いわば宇宙の盲目的(無意味な)意志によって起こる。それが満たされないと不満だけである。人間たるもの、そんなもの(生存欲)の奴隷になってはいけない。

「一切皆苦」は否定できない現実

- 楽とは苦が解消したこと(欲望が満たされたこと)を指す。一つの苦が解消しても、他の苦は残る。例えば、腰痛は治った(楽)が、貧乏(お金に困っている状態)のまま(苦)。苦(不満、思い通りにならないこと)は、一つや二つではないはず。誰であっても多数存在。それらすべてが一片に解消することなどない。
- 楽を得たことが、結果としてさらに大いなる苦を味わう要因になる。人間の欲は死ぬまで尽きることがない。一つ得られれば、もう一つ欲しくなる。つまりもっと得たいという思いが生じる。一つ得るより二つ得る方が得明らかな難しい。すなわち受ける苦も大きくなる。もし最初の一つが得られないままであれば、二つを得たいなどとは思わない。二つ欲しいという願望が生じた原因は、一つ得たこと。つまり楽を得たことにある。すなわち大きな苦の原因が、実は楽にあった。それだけでも楽と苦は、対称ではない。
- 人類という種を生き残らせようとする意味のない自然淘汰によって身に着けられた生存欲に、生まれた時点から生きている間ずっと使役され続けているのが動物としての人間である。つまり欲望の奴隷として生まれてきたわけである。得たくない快樂を生まれさせられたことによって、得なければならぬ立場に追い込まれたのである。そこに真の楽、幸せはない。本当の幸福とはそんな生存欲に支配されることなく、人間として主体的に(かつ自由に)選択したものでなければならない。

苦の克服



- ★上図で、bから苦を克服して楽へ上がる際、人間は前よりも成長しているはずだから、dでプラス領域に上がるとみなすことは可能か？
- ・aよりもdの方がより幸福である根拠はない。それは単に時間が経過していることを意味しているに過ぎない。
 - ・aから苦が始まりbで欲望が叶えられ結果cに上がったのは、自分の力によらない外界の変化即ち偶然そうなったに過ぎない。
 - ・ただ外界の使役によって、苦だ。楽だ。と感じているだけでは何も進歩しない。その苦と楽を死ぬまで繰り返す人生となる。

◎苦の克服

苦の要因を客観的に見極めること。即ち、まず外界からどのような刺激を受け、それによってどのように欲望が生起され、その結果苦が生じる。それら一連のメカニズムを俯瞰的に、第三者的に、かつ科学的に観察した上でその要因を分析し、主体的な存在である自分が具体的な行動を取ることによって、確実に苦を克服することができたならば、それは自己の成長につながる。下図のように苦を乗り越えるたびに、楽へ上昇するとみなせる。ただし、その場合でも、苦そのものを消滅させることはできない。苦は常に存在する。

